

ごく普通の

姜信子



在日韓国人

姜信子

く普通の
日韓国人



ごく普通の在日韓国人

AN朝日ノンフィクション

1987年12月15日 第1刷
1988年6月10日 第7刷

定価1200円

著 者	姜 信 子
発行者	八 尋 舜 右
印刷所	図 書 印 刷
製本所	青 柳 製 本
発行所	朝日新聞社

編集・図書編集室
販売・出版販売部

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話・03 (545) 0131 (代表)

振替・東京 0—1730

ISBN4-02-255793-1

©NOBUKO KYŌ 1987

Printed in Japan

ごく普通の在日韓国人 目次

プロローグ 7

第一章 日本人との結婚

父の言葉、母の手紙 14

「民族」が恋愛を遠去ける 25

在日韓国人の嫁 35

第二章 「姜信子」までの遠い道

日本人はプラスで韓国人はマイナス？

「竹田存子」か「姜信子」か 60

姜信子の失敗 72

第三章 わからない「民族」

私は何者なのか 88

置き忘れた外人登録証 102

帰化をめぐる 113

第四章 在日韓国人社会と日本人社会のはざま

限りなく外国に近い国、韓国 134

日本人でもなく、韓国人でもない 145

第五章 在日韓国人家庭をとりまく現実

ある在日韓国人家庭の歴史 162

新聞記者になりたかった 181

第六章 次代に私が伝えられること

在日韓国人として普通に生きる 196

娘へ——内なる差別する心との闘い 211

装幀・出下武司

ごく普通の在日韓国人

本書は朝日ジャーナル増刊号「ノンフィクション探検一九八六」に掲載されたものを、大幅に加筆し、まとめたものである。

プロローグ

昭和三六年に私は日本で生まれた。

祖父母が日本に渡ってきた時より数えて、在日韓国人として三代目。つまり在日三世となる。それが私である。この日本で在日韓国人ゆえに抱えこまねばならない種々の問題に思い悩みつつ、日々を普通に平穏に送っている在日三世としての私がいる。

問題の解決を生活の中心に置いているのでもない。問題のあることにまったく目をつぶっているか、あるいは、そんなことに考えも及ばないのでもない。気にしつつ、考えつつ、時に憤りつつ、そして、時にそのことを忘れる。在日韓国人として日本で生きることの意味やら不安

やらが心の奥底にいつもモヤとなっていたちこめている。そういう状態の中に日常的にいと、モヤがあることに慣れてしまう。それが自分にとっての普通の状態になってしまふのだ。

日々の営みの中で、いつかどうにかなるさと気休めを自分に向かって言うようになる。外に向かつて大きな声で訴えかけるなんてこと、私にはできないわ。偉い人たちに頑張ってもらえれば……、そう考える多くの、その意味において普通の、在日韓国・朝鮮人のひとりとして私がいる。いや、「いた」と言うほうが今となっては正確かもしれない。

声なき民から、自信はなくても小さな声で何とか話そうと思う人へと、私は一歩踏み出そうとしている。私の背を押すのは、ここ数年の私の身边に起こった変化である。

大学を一年留年した。いわゆる「就職差別」が原因である。初めて自分の身に深刻な問題として「差別」がふりかかってきた。まだ若く、日本で生きていくことしか考えられない私にとって、韓国籍ゆえに拒否されたことが生死にかかわる問題のようにはしなかった。

なんとか日本の広告会社に就職したその年、私は結婚した。相手は日本人。いちおう、国際結婚である。ここであえて夫を「日本人」と書くことが不自然に感じられるくらい日本になじんでしまっている私。しかし、この結婚でも、私は外国人なんだと感じずにはいられなかった。問題は私の戸籍だった。

在日韓国人である私の戸籍は、当然、韓国にある。婚姻届を出すには戸籍謄本も添付しなけ

ればならない。そのためには、まず、韓国から短くて二―三週間、長くて一―二カ月かけて謄本を取り寄せることが必要である。この時は姉が余分に持っていたものを貰うという幸運に恵まれた。

大変なのはその次である。日本の役所には、ハングルで書かれた謄本を日本語に訳して提出しなければならぬ。そもそも私は朝鮮語を知らなかった。地名は漢字でという注文には、韓国から来た留学生にもこたえられなかった。아とかㅈとかいう文字でわかるのは音だけで、それが漢字でどうなるのかは、生粋の韓国人にとっても無理難題だった。

私たちふたりは忙しい仕事の合間を縫って、半月の間、地名のわかる人を求めてかけずり回った。そしてとうとう池袋サンシャインシティにある韓国文化院で解決してもらったのだった。驚いたことに、祖父の出身地として記載されている地名は、韓国にはもうない。地名改正があったという話である。消えた地名に振り回された半月。私の祖父母が戦前に日本に来てから流れた時間。今の私と韓国との間にある遠い距離を実感させるには十分だった。

遠去かっていく韓国。私の中に大きな比重を占める日本。その日本に敵としてある在日韓国人である私への差別や偏見。オリンピックを前にした韓国ブームの中で、在日韓国人の頭越しに韓国へ韓国へと人々の目は向く。在日韓国人がどんなに親しく感じても、日本に住む韓国人に用はないとばかりに日本社会はつれない。どうして不安を感じずにいられようか。結婚して

早々に娘を持つ身になって、その不安は増幅される。

「もし、日韓関係が険悪になったら」

「もし、食糧難などの非常事態が起きて外国人が排斥されたら」

限りなく「もし」を考える。私が韓国籍ゆえに、非常の際には一家離散もあるかもしれない。根が心配性の私は、ささやかな幸福を手にして限りなく不安を作り出す。

いっそ帰化してしまおうかと、心の隅のほうで声がする。日本人の友人たちも気軽に帰化をすすめる。しかし、なかなか答えは出せない。民族とは何か。自分にとって在日韓国人であることとは？ 国籍はどういう意味を持つのか。さまざまな考え方や感情の入り乱れる在日韓国・朝鮮人社会、それに対峙している日本社会。そのもつれた糸にからめとられ翻弄される。帰化という行為が在日韓国・朝鮮人に、ある種のうしろめたさを感じさせるのも事実なのだ。

本人がどんなに前向きに考えてきちんと出した結論でも、冷たい社会の目を感じる部分がある。帰化した者やその家族に対する在日韓国・朝鮮人の反応。うけいれる側の日本人の反応。そのどちらにも冷ややかな空気を感じる。私自身は考え方の異なる人に何を言われようとかまわない。だが、親・兄弟が私のことでいろいろと言われるのは困る。

帰化するしないは抜きにしても、私にとっての民族、国籍、在日韓国人であることの意味についてきちんと結論を出さなければならぬ時期に私はいるようだ。産休をとって考える時間

を持ったのも、そのいい機会となった。今までの二十数年の人生を生まれた時からたどって、知りえたこと、考えたこと、言いたいことをまとめる。そして、普通に生きる在日韓国人のひとりとして多くの人々に私の声を手渡したい。

何十万という在日韓国・朝鮮人が、それぞれに複雑な思いを抱え、小さな声、大きな声、声なき声を発して生きている。その中のひとつとして、私の声がある。

なお、これから書き出すのに、用語上の問題を片づけなければならない。韓国か朝鮮かとよく問われる。いちおう、こうしたい。大韓民国は韓国、朝鮮民主主義人民共和国は北朝鮮。言葉は朝鮮語。そして朝鮮文化・朝鮮民族とする。政治的意図とか確固たる考えがあるわけではない。単に習慣としてそう呼び慣れているから。

最初にこんな約束をしなくてはならないということが、もう、問題の複雑さを匂わせる。これに向き合うのも、在日韓国人としてこの時代に生きる私の運命なのだろう。

第一章

日本人との結婚

父の言葉、母の手紙

私の夫、今村智が初めて私の家に足を踏み入れたのは、一九八二年一〇月一日。私が在日韓国人であることを彼が知った日でもある。

はつきりと日付まで覚えているのは、この日に彼を両親に紹介したからというわけではない。まだ二回しか会ったこともなく、あまり話をしたこともない友達以前の関係しか彼と私の間にはなかった。私の国籍がわかってもめたとか、彼がショックをうけたとか、暗い事件があったからでもない。この日、私は、遊びの誘惑多い寮を出て家に帰って勉強に専念しようと、引越しをしたのだった。